

人間主義を学ぶ

—池田・ゴルバチョフ対談『二十世紀の精神の教訓』から—⁽¹⁾

勘 坂 純 市

1. はじめに
2. マルクス主義
3. 人間主義
4. 人間主義と仏法
5. むすび

1. はじめに

池田大作創価学会会長（当時）は1974年にはじめてロシア（当時ソ連）を訪問した⁽²⁾。このとき池田はコスイギン首相と対談し、さらに、翌年の第2次訪問では、モスクワ大学より名誉博士号を受賞する。これが、池田が受けた最初の名誉博士であり、それから30年で、彼は170の名誉学術称号を世界から受けることになる⁽³⁾。

なぜ、池田大作は世界からこれだけの賞賛を得ることができるのか——

それにはさまざまな理由があるだろう。例えば、ロシア訪問や中国訪問などと繰り広げられた民間外交に対する評価、また、歴史家アーノルド・トインビーやローマクラブ会長アウレリオ・ペッチェイなど、さまざまな知性との対談に対する尊敬、さらには、詩人、写真家など、文化人としての活躍に対する賞賛など。しかし、私は、池田の行動がここまで世界で受け入れられている最大の理由は、彼が一人ひとりを大切にするという実践を貫いてきたからだと思えてならない。

池田はロシアを訪問する際、「共産主義の国に、なぜ行くのか」と問われたとき、「そこに人間がいるからだ」と答えたという。こうした、池田の行動に対して、現地の識者の一人は次のように述べている。

〔池田〕会長の、社会運動家、宗教者らしい人間主義、平和主義は、どうしたら人間は幸せになれるのか、生きがいのある人生を築けるのか、という情熱から来ている。それがイデオロギー一辺倒の社会では、実に新鮮だった。その同じ思考の、突き詰めたところに、ベルリンの壁の崩壊があり、東欧社会の変革があったのです。⁽⁴⁾

池田は、一人ひとりを大切に、あくまで一人ひとりが「どうしたら幸せになれるのか、生きがいのある人生を築けるのか」という行動に徹した結果、イデオロギーの異なるロシア人とも友情のネットワークを広げることができた。この証言は、この事実を明確に物語っている。

さて、ロシア（ソ連）と池田の30年の交流の中でも、1つのハイライトは、ミハイル・S・ゴルバチョフとの対談だろう。1990年の最初の会談で、当時ソ連大統領であったゴルバチョフに、池田は次のように語った。「私もペレストロイカと新思考の支持者です。私の考えと多大な共通性があります。また、あるのが当然なのです。私も大統領も、ともに『人間』を見つめているからです。人間は人間です。共通なのです」⁽⁵⁾。あくまでも一人ひとりの人間を見つめて行動してきた池田大作。それと同じ志向をもった指導者が、ソ連にも現れた——池田とゴルバチョフとの対談は、そのことを強く感じさせた。両者の対談はその後も続けられ、1996年には『20世紀の精神の教訓』⁽⁶⁾としてまとめられている。

本稿では、この対談を中心に、池田が展開してきた「人間主義」の思想・実践を学んでいきたい。以下の考察はあくまで現時点での筆者の試論に過ぎないが、今後の池田大作研究にいささかでも資することを願ってまとめさせていただいた。以下、2節で人間主義と対比される「マルクス主義」について述べた後、3節で「人間主義」の特徴を考察する。そして4節では人間主義が「仏法」思想とどのように関連するかを考える。

2. マルクス主義

ゴルバチョフがソ連の大統領であったからで当然ではあるが、マルクス主義の問題は、両者の対談で最も重要なテーマの一つであった。対談では、主にマルクス主義は人間主義と対比されながら論じられている。ここではその比較を以下の5つの論点にまとめてみたい。すなわち、第1に、マルクス主義の「急進主義」に対する人間主義の「漸進主義」、第2に、マルクス主義の「前衛理論」に対する人間主義の民衆主体、第3にマルクス主義の「知識」重視に対する人間主義の「知恵」重視、第4に、マルクス主義の「外在的規範」に対する人間主義の「内在的規範」、第5に、マルクス主義の「ロゴス中心主義」的傾向に対する、人間主義の「言語の虚構性」の自覚、である。本節では、まず、ここにあげられたマルクス主義の諸特徴を考察していきたい。

（1）急進主義

急進主義と漸進主義は、『20世紀の精神の教訓』で最も多く取り上げられた問題であった。例えば、急激なソビエトの崩壊の後にロシアを支配した「民族的ニヒリズム」を論じたときに、池田は次のように述べている。

帰するところは、……おそらく、後世に語り残すべき「20世紀の精神の教訓」のなかでも最大のものである「急進主義」と「漸進主義」というテーマへと、向かっていくのではないでしょうか。／20世紀末に生きる私たちは、フランス革命からロシア革命へと至る近代革命の系譜の破綻を目のあたりにしているだけに、この系譜に疑問を投げ続けてきた、いわゆる“保守主義者”——ゲーテやエドモンド・バーク、アレクシス・トクヴィル、先に論じたガブリエル・マルセルなども、当然その一人です——の考え方を、虚心に再評価すべき段階にきていると思います。（下巻、190-1頁）⁽⁷⁾

「急進主義」と「漸進主義」は、単に、社会を急激に変革するか、少しずつ変革するかといったスピードの問題ではない。後に論ずるように、そこには、社会変革に対する根本的な態度の相違がある。

（2）前衛理論

「前衛」とは、ガード（guard）の前、すなわち先陣を切るということだ。エリートが先陣を切っていく——それ自体は必ずしも悪いことではないだろう。私自身もかつてそうした行動に憧れていた。しかし、池田は、「そこに“前衛”理論と呼ばれてきた運動論の陥りがちな落とし穴」があるという。なぜか。前衛理論では、「革命運動というものは、意識の自然発生的な盛り上がりを持って始まるものではなく、社会意識や階級意識に目覚めた少数の人々が、職業革命家集団としての前衛党を結成し、意識の遅れた一般大衆をリードしていくかたちをとらざるをえない」（下巻、78頁）からだ。

社会にはさまざまな問題がある。仮に、その解決法を一部の人だけが「わかっている」とすれば、その「少数の人々」は、「意識の遅れた」民衆を指導するという態度をとりかねない。「意識に目覚めた俺たちが、愚かな民衆を導いてやらなくてはいけない」というわけだ。しかし、その発想は間違っている、というのが池田の前衛主義批判であろう。この批判の背景にも、後に論ずるように、マルクス主義的な社会認識・社会変革の態度に対する池田のより根源的な批判がある。

（3）外在的規範

池田はしばしば、キリスト教、マルクス主義といった西洋の思想が、「外在的規範」をもつと指摘している。ゴルバチョフとの対談でも、例えば次のように述べている。

人類は、何度、悲劇を繰り返したことでしょう。そうした“神”や“イデオロギー”を特徴づけているのは、……「内在的規範」に対していえば、それが著しく「外在的規範」であったということです。／20世紀における共産主義の失敗を、文明論的な流れに沿って考えるなら、私は、何よりも「外在的規範」の挫折と捉えたい。とはいえ、自由主義社会に、それに代わりうるものが用意されていたとは、到底いえません。（下巻、42頁）

キリスト教の説く“神”や、マルクス主義のいう“イデオロギー”は人間の「外」から人びとの行動を律する規範であるというのだ。

（4）知識重視

池田の恩師である、戸田城聖第二代創価学会会長は、「知識と知恵を錯覚しているのが、現代の最大の問題である」といったという。この恩師の思想をもとに、池田は次のように述べている。

「知識」を「知恵」と錯覚することこそ、近代の急進主義が陥った落とし穴であるといつてよい。／……知識イコール知恵と思い込み、知識によって描き出されたユートピアへの青写真どおりに、強引に社会をつくり変えようとしたのが、近代の急進主義の流れでした。たとえば、目的とするゴールがあらかじめわかっているのなら、到達するのは早ければ早いほどよい。それを理解しないわからず屋には、多少力づくでのぞんでも止むをえない。（上巻、117頁）

知識と知恵の錯覚、すなわち、「知識イコール知恵と思い込み、知識によって描き出されたユートピアへの青写真どおりに、強引に社会をつくり変えようとする思考法に、私もながく囚

われていたと思う。そこで、ここでは、知識と知恵の問題を、私自身の学生時代の体験を踏まえて説明してみたい。世の中には、環境破壊、貧困、戦争といった問題が沢山あり、そのような課題を何とか解決したいと勉強をする人が数多くいる。学生時代の私もそうであった。だが、そうした問題の解決策は容易に見出せない。そのような時には、まるで真つ暗な闇の中を歩いているような気持ちになるものだ。しかし、ときにそうした闇に“光”がさすような体験をすることもある。その感動はすさまじい。本を読んで、また、話をきいて、「ああ、この問題の背景にはこうした社会構造があったのか」と知ったときの感動——、社会科学を学ぶ原動力はこうした感動にあるともいえるだろう。私が、はじめてこうした感動を体験したのは、大学1年生でマルクス主義系の本を読んだときだった。私は1963年生まれだからマルクスに嵌るには少し世代が後過ぎるのだが、当時の私は、それこそ流行から外れたはしかにかかったみたいマルクス、もしくはそれに関連する本を読み漁っていた。マルクス主義の理論の“すごい”ところは、問題の「本質」を明らかにして、その「解決策」を示している——と少なくとも感じられる——ことだ。「この問題を生み出している構造はこうだ。その構造は、こうすれば変革できる！」こうした「科学的分析」を読んで、学生時代の私などは、「なるほど！」と感動したわけである。

社会にあふれるさまざまな問題を知って、その不条理さに怒りを覚える。なぜこんな現実があるのか、また、理論的には明らか——と思われる——解決策がなぜとられないのかと憤りを感じる。それは若い「正義感」の発露でもあったのだが、そのとき私は、知らず知らずのうちに池田のいう「知識によって描き出されたユートピアへの青写真どおりに、強引に社会をつくり変えようと」する思考法の罠に囚われていた。その態度は純粹で正しいように見えるが、そこには大きな落とし穴がある、と池田はいうのだ。この点は、次の「ロゴス中心主義」の問題を考察することで、より明らかになる。

(5) ロゴス中心主義

ロゴス (Logos) とは、言語、もしくは理性的法則を意味する。例えば、マルクス主義は、歴史の発展や社会の構造を明らかにする「法則」を明らかにしているというが、この議論の前提には、社会の「法則」は人間の理性によって解明され、言語によって表現されるという信念があることに注意しなくてはならない。この信念を、池田は「ロゴス中心主義」といい、その淵源を、^{はじめ}「太初に言 (Logos) あり、言は神と供にあり、言は神なりき」⁽⁸⁾ (ヨハネ伝福音書第1章1節) と説いたキリスト教に求めた。すなわち、『神の言葉』を一切の根本とするロゴス (言語) 中心主義は、キリスト教文明の根底にある、もっとも大きな特徴といってよい (上巻、347頁)。その上で、池田は次のように指摘する。

言葉は、はたして生々流動しゆく実在を、あますところなく写し取ることができるのか。人間はそうした実在を固定化してしまう「言語の虚構性」の罠、「抽象化の罠」から、どうしたら抜け出すことができるのか——このような「言葉の虚構性」に対する警戒、さらには「言葉への不信」さえもが、いまほど必要とされている時代もない。(下巻、88-9頁)

先に指摘したように、マルクス主義、また社会科学の多くは、言葉で表現される理性的法則によって現実の問題の原因を明らかにし、その解決策を示そうとする。しかし、そもそも現実を「あますところなく写し取る」ロゴスなど存在するのか、と池田は疑問を呈している。もし

も、ロゴスによって現実がすべて表現されると考えるなら、それは、「言語の虚構性」の罫・「抽象化の罫」に陥ることにならないか、と彼は警告するのである。

このように、マルクス主義は、急進主義、前衛思想、外在的規範、知識中心、ロゴス中心主義によって特徴付けられる。こうした特徴の根底にあるのは、理性によってつくりだされた理論が、人間の進むべき道を教えてくれるという発想だ。学生時代の私を熱狂させた「この問題を生み出している構造はこうだ。その構造は、こうすれば変革できる」という思考法がまさにそれであった。もし、正しい道がすでに示されているのなら、速く行ったほうがいいに決まっている。つまり、「急進主義」にならざるを得ない。また、理論が道を示してくれるのなら、その理論を学んだエリートが、理論を理解しない民衆をリードするという「前衛思想」がとられるのは当然だろう。さらに、人間の「外」にある理論が人びとの行動を決めるのであれば、それが「外在的規範」となることはいうまでもない。マルクスの理論は、一つの「知識」であり、その根底には、まさに「ロゴス」によって現実が説明しつくせるという「ロゴス中心主義」があるのだ。

3. 人間主義

では、池田のいう人間主義は、こうしたマルクス主義とどのように異なっているのか。この問題を考察するためには、まず、池田が、ロゴス（言語、理性的法則）が現実のすべてを解明することなどありえないと考えていることを理解する必要がある。この点に関して、池田と対談を行ったヨハン・ガルトゥングが興味深い話を披露している。

私は、25年かけて、やっと一つの基本的な洞察にたどりついたことになります。その洞察とは、社会の現実はいま以上に複雑で矛盾に満ちており、数学のような一つの矛盾なき思想体系によって適切に表現することはできない、というものです。⁽⁹⁾

平和学者ガルトゥングは、世界に平和をもたらすには、どうしたらいいのかと真剣に考えていたのだろう。「なぜ戦争が起きるのか」「なぜ貧困がなくなるのか」——こうした問題を考察するために、彼は、数学的な論理、すなわち、ロゴスによって社会を完全に説明するようなモデルの構築に真剣に取り組んだと考えられる。もし、そうした理論体系が完成すれば、世界の戦争や貧困の原因も明らかになり、適切な対策も打てるはずだ。彼は25年もの間、こうしたモデルの構築に取り組んだ。しかし、その結論は、「そうした理論体系などできない」ということだったのである。このガルトゥングの発言を受けて、池田は、「抽象的な論理や概念は、あくまでも現実の“部分観”にすぎません」と述べる⁽¹⁰⁾。つまり、理性がつくりだす理論は、現実の一部分を照らし出すことはできるが、全体を照らすことはできない、というのだ。

こうした話をすると、「では理論なんか勉強しても意味がないですね」などという学生が必ずいる。しかし、そうではない。そうした学生には、理論は“懐中電灯の光”だと説明する。たしかに、理論は現実の一部分しか明らかにしない「部分観」に過ぎない。その意味で、現実の問題の原因をすべて明らかにし、進むべき道を示してくれるような“光”を、理論が発することはない。学生時代の私を熱狂させたような光を学問は発していないのだ。しかし、一部分しか照らさないような光でも、無用ではない。暗闇を進む中で、一本の懐中電灯は大きな助けにならないだろうか。しかも、その懐中電灯は、できるだけ強い光を発したほうがいい。照らし出す範囲は一部分に過ぎないといっても、より広い範囲をより明るく照らす懐中電灯は、よ

り有用であるはずだ。学問をすることは、この懐中電灯のレンズを磨くことであり、決して無駄ではない。

もちろん性能の良い懐中電灯があるだけでは不十分だ。懐中電灯は、それを使って目的に向かって歩みを進める人がいてはじめて生かされる。例えば、ある地域の貧困をなくすために実践していく——そのように責任を持って行動しようとする人間がまずいて、その人が学問を使っていく。この順番が非常に大事だ。もし、先ほど言ったマルクス主義のように、はじめから理論が進むべき道まで教えてくれるのであれば、人間は理論が示した道を歩くだけで、何も決断する必要はない。そうすると人間は単なる理論の駒のような存在になってしまう。「完璧な」理論があることによって、人間の存在は、逆に、限りなく矮小化されるのだ。池田はクレアモント・マッケナ大学での講演「新しき統合原理を求めて」(1993年)で、次のように述べている。

何らかの「歴史的必然性」に基づく世界観は、ともすれば、人間が自らの行動によって運命を切り開いていく力を否定してしまう傾向にあるといえないであらうか。⁽¹¹⁾

「自らの行動によって運命を切り開いていく力」を発揮する人間が、理論の懐中電灯の光を利用して、一步一步進んでいくのだ。歴史・社会の「必然的」法則を明らかにする理論が人間の生き方を決めるようになれば、こうした「運命を切り開いていく力」は、かえって否定されてしまう。

この人間の力は、理論によって解明できないかもしれないが、確かに存在する。それは、日常的な経験からも確かめることができるだろう。例えば、学生の多くは勉強と様々な活動の両立に悩んでいる。これは、私も含めた多くの人びとが悩んできた問題だが、いまだに、「こうすれば両立できる」という完璧な理論やマニュアルなどない。では、両立は不可能なのかといえ、そうではない。現実には、両立に成功した人は数多く存在するからだ。つまり、マニュアルのように理論化できないけれども、人間にはそれをやりきる能力がある。現実の社会は矛盾に満ちている。不可能と思える課題もたくさんある。しかし、人間にはその矛盾を生き切る力、不可能を可能にする力、まさに、「自らの行動によって運命を切り開いていく力」があるのだ。解決ができないと思える具体的な問題——少なくとも、抽象的な理論が「正解」を示すことができない問題——をのりこえていく力が人間にはある。この力を「知恵」と呼ぶのだろう。その人間の力、人間の知恵の発揮を出発点とすべきであって、理論が出発点ではない。逆に「完璧な」理論を説くことは、この人間の知恵を否定することになる、と池田は指摘するのだ。

ヴィクトル・A・サドーヴィニチとの対談で、池田は次のように語っている。

人間にとって未来とは、希望と不安が背中合わせになった、原理的に予測不可能な世界です。……そこを取り仕切るのは、いつにかかって自由や責任という人間の内発的な精神性です。「法則」や「決定論」にこだわって自由や責任に背を向けることは、未来を拒否することにほかならず、その結果、絶望という「死にいたる病」(キルケゴール)に冒され、人間であること自体の否定にまで行きついてしまいます。⁽¹²⁾

矛盾に満ちた現実を生きていく力は、「自由や責任という人間の内発的な精神性」である。そこに人間の人間たるゆえんがあるのであって、抽象的な理論が示す「法則」がすべてを決めるのであれば、「人間であること自体」が否定されてしまう。

「自らの行動によって運命を切り開いていく力」、不可能を可能にする人間の力、人間の知恵を出発点とすべきことは、ゴルバチョフとの対談でも、強調されている。池田は、ゲーテのファウストをめぐって次のように述べる。

ファウストは、「太初に言ありき」に納得できず、「太初に意ありき」「太初に力ありき」と言い換え、最後に、「太初に行ありき」と翻訳してみて初めて、心から安堵します。／このくだりは、謎めいた含意性におおわれており、さまざまな考察が行われてきましたが、私は、端的に言って、巨人ゲーテのもっとも東洋的な側面であり、東洋的発想ではないかととらえています。(上巻、347頁)

「太初に言ありき」は、先に述べたように、聖書のヨハネ伝福音書の冒頭にある。しかし、ゲーテは、はじめにあるのは「言葉 (Logos)」ではなく、人間の「行」であると考えた。「太初に行ありき」だ。これまでの文脈でいえば、人間の可能性、その「行動によって運命を切り開いていく力」がはじめにある。マルクス主義のように、理論、ロゴスがはじめにあるのではない。

人間には不可能を可能にする力、矛盾した具体的問題を解決する知恵がある。その力、知恵の発揮から出発すべきであって、それなしにどんな立派な理論を作ってもだめだ——池田の思想が、しばしば「人間主義」といわれる一つの理由は、こうした人間の可能性へ信頼にあるのではないだろうか。また、池田は、人間の可能性を信じることを、「楽観主義」としても語っている。

真実の楽観主義とは、なんらかの客観的条件が整うことによって可能となる“見通し”などとは次元を異にし、無条件に成り立つ透徹した“自信”であり、あなたのおっしゃる“信念”で[す]。……／かのマハトマ・ガンジーは底光りするような強靱な人格を支える根本の力も、非暴力を行う人間の精神的な力への無間の信頼——つまり楽観主義でした。(上巻、308頁)

「無条件に成り立つ透徹した“自信”」、また「人間の精神的な力への無限の信頼」、それこそが楽観主義だ。不可能に思える状況にあっても、それを切り開いていく力が人間にはある。その力を信じる“自信”の中にこそ真の楽観主義はある。「何とかなる」というのではなく、「自分には目の前を課題をのりこえる力がある」という信念こそが、池田のいう楽観主義に違いない。

先に私は、「マルクス主義」が、急進主義、エリート主義、外在的規範、知識中心、ロゴス中心主義なのに対して、「人間主義」の特徴が、漸進主義、民衆中心、内在的規範、知恵重視、言語の虚構性の自覚にあると述べた。こうした、諸特徴は、いま述べた一人ひとりがもつ不可能を可能にする力、矛盾した具体的問題を解決する知恵を開くことから出発しようとする基本姿勢から説明できるだろう。まず、漸進主義——採るべき道を示す「完璧な」理論などなく、現実の問題は、一つ一つ人間が知恵を働かせて解決していくしかない。それには、ゆつくり進むしか方法はないだろう。次に、民衆中心——抽象的な理論を理解する者たちが「無知な」民衆を指導していくのではなく、一人ひとりに内在する不可能を可能とする力を開いていくことによって、社会を変えていこうとする。また、内在的規範——人間の「外」にある神や理論によって行動を律するのではなく、すべての人間がもつ可能性を開くことが出発点だ。さらに、知恵重視——矛盾に満ちた具体的な問題を解決するのは人間の知恵だ。理論は、その助けをするに

過ぎない。先にあげた例を用いれば、懐中電灯の光は、自らの責任で一步一步前進しようとする人がいてはじめて生かされるのだ。最後に、言語の虚構性の自覚——ロゴスで表現される理論が現実を説明し尽くすことは絶対にない。出発点とすべきは、ロゴスではなく、人間の「行」である。

では、こうした人間主義は、仏法思想との関連でどのように展開されるかを次に考えてみたい。

4. 人間主義と仏法

人間主義と仏法については、4つの問題を考察していきたい。第1に、不可能を可能にする人間の力を仏法ではどう捉えているか、第2に、仏法の「法」はどのように現れるか、第3に、その「法」はどのように伝えられるのか、そして最後に、仏法という人間主義の実践とは何か、である。

(1) 人間の可能性

まず、人間の可能性を仏法ではどう捉えているか。池田は、先に紹介したように楽観主義について述べた後、次のように続けている。

大乘仏教の精髓である法華経では、すべての人々が「仏性」という金剛にして不壊なる、そして清浄にして無垢なる尊極の生命を有していると説きます。／その自他ともに有する「仏性」への確信は、無限の希望に生き、他者に無限の希望を与えゆく、透徹した楽観主義を保障してくれるはずです。(上巻、309頁)

すべての人間がもつ不可能を可能にする力、さまざまな状況を乗り越えていく力を、仏法では「仏性」、仏の命という。そうした「尊極の生命」への確信こそが、池田の「楽観主義」、そして「人間主義」を支えているといえよう。また池田は、「内在的普遍」について次のように述べている。

人類のすべてに内在する、大いなるコスモポリタンとしての“自己”を開きゆくこと……。……／仏典には、「我が己心を観じて十法界を見る」という実践論が述べられています。透徹した自己洞察の実践を貫くとき、おのずから開けてくる自己の生命の「尊厳性」「全体性」「普遍性」の自覚——前にもお話した「内在的普遍」という私の主張も、こうした「自己知」を説く仏法の哲理に根ざしたものです。(下巻、107頁)

人間生命がもつ力、その「尊厳性」「全体性」、そして、そうした力はすべて人に内在しているという「普遍性」こそが、内在的普遍の意味するところであった。この思想も、「我が己心を観じて十法界を見る」という仏教哲理に基づいていたのである。

(2) 仏法の法

次に、仏法の「法」とはどのように現われるのか、という問題について考えたい。先にマルクス主義について考察した際、社会の現実を完璧に解き明かす「法則」などない、と指摘した。では、仏法という「法」とはどのような存在なのか。これについて池田は次のように述べている。

かつて私は、日本のある宗教学者から創価学会の目指すものについて、「究極的に求めているものは何か」との質問を受けました。／私は即座に、「それは久遠元初の法です」とお答えしました。「久遠元初」とは、生命の究極の姿に回帰した状態であり、そこに働いている「法」が妙法蓮華経であると説きます。……／重要なことは、この「久遠元初の法」が、第一義的には、内的で不可視の存在であるということです。その「法」は、時々刻々と変化する「行い」の中に体现される以外に、ありようがない。／真理それ自体、つまり仏法の立場でいえば、仏の知恵は、「言語の虚構性」を越えたものとされます。それゆえに、仏が、民衆を救済する慈悲の行動に出るとき、真理を体得した人の「必然の表現」としての“言葉”によってのみ、真理は人々に示されるのです。……（上巻、356-7頁）

ここでは、まず、「久遠元初の法」が、「内的で不可視の存在である」と指摘されていることに注目したい。その法は、ロゴスによって説明することはできない。すなわち、それは『言語の虚構性』を越えているのだ。この点は、マルクス主義を代表とする多くの社会科学の法則が、ロゴスによる表現を追及してきたことと対照的であるといえるだろう。では、ロゴスによって表現できない「久遠元初の法」をわれわれはどのように知ることができるのか。その答えは、池田の次の言葉にある。すなわち、「その法は時々刻々と変化する『行い』の中に体现される」と。つまり、人間の行動の中に、仏法の「法」が現われる。われわれは、それを体现する人間がいて、はじめて仏法の法を知ることができるのだ。仏の知恵は、ロゴス（言葉）では表すことはできない。「それゆえに、仏が、民衆を救済する慈悲の行動に出るとき、真理を体得した人の『必然と表現』としての“言葉”によってのみ、真理は人々に示される」という。ここでいう“言葉”とは、抽象的なロゴスではない。それは、例えば、さまざまな問題に直面している人への励ましの“言葉”であり、また、具体的な問題の解決を図る一つ一つの細かいアドバイスであったりする。そうした具体的な知恵によってのみ、真理が示されるのである。

池田は、ネパール・トリブバン大学での講演「人間主義の最高峰を仰ぎて——現代に生きる釈尊」（1995年）で、次のように述べている。

仏法では、少々、難しい言葉ですが、「不変真如の理」にも増して、「随縁真如の智」を重んじております。つまり、時代や状況によっても変わらない真理に基づいたうえで、刻々と変転する現実に応じて、自在に智慧を発揮していくことが大切であると教えているのであります。⁽¹³⁾

「刻々と変転する現実に応じて」自在に発揮されていくものこそ知恵であり、それを通して「不変真如の理」は示さるのである。法は、「時々刻々と変化する『行い』の中に体现される」。この点を、池田は、別の箇所ではガンジーの言葉を紹介しながら展開している。

……私はさきに、「史上の神を説かず、今日生きている人間を通して神を示すがよい」とのガンジーの言葉を掲げました。それは、「太初に行ありき」とのゲーテの発想ときわめて強く響きあっていると考えます。／また、この対談でも確認したように、釈尊が「出自」よりも「行い」を重んじたことは、よく知られています。日蓮大聖人も信仰の目的について、「教主釈尊の出世の本懐は人の振舞にて候けるぞ」⁽¹⁴⁾として、硬直化し、ドグマ化しがちな教義、すなわち「言葉」よりも、人間の「行為」や「実践」を重視しています。（上巻、347-8頁）

仏法の「法」は、「今日生きている人間」、ゲーテのいう「行」を通して示される。「人の振舞」にこそ仏の悟りはある。逆にいえば、そうした「振舞」をする人間がいなければ、「法」は現れ

ない。この点は、法はどのように伝えられるか、という問題を考えるうえでも重要である。

(3) 法はどのように伝えられるか

それを体現する人がいなければ「法」は現れない——。私は、仏法で「師弟」の重要性が強調される一つの理由はそこにあると考える。もしマルクス主義のように、法則がロゴスで示されているのなら、それを本などで学べばいいだろう。しかし、「仏法」は、それを「行」ずる師匠の振舞いを通してしか、学ぶことはできない。池田は、「手本」という存在について次のように述べている。

一人の人間が、その時代を、誰よりも深く生き抜くことにより、時代精神の比類なき体現者として、人々の手本であり続ける——このことは、古今、変わらぬ鉄則であったし、今後も、そうあり続けるでしょう。……／仏法で「一人を手本として一切衆生平等」⁽¹⁵⁾と説かれているように、「手本」たりうる一人の人物を欠けば、社会の精神的状態や道徳秩序なども、きわめて不安定なものとなってしまいます。(上巻、55-6頁)

これは社会一般の道徳的な状況について語っている箇所だが、『手本』たりうる一人の人物の重要性が明確に指摘されていることに注意したい。「一人を手本として一切衆生平等」にある「手本」とは師匠であり「一切衆生」とは弟子であるとも考えることもできるだろう。「手本」である師匠を欠いては、弟子は道を見失いかねない。

さらに池田は、ここで示された仏教の平等観について、キリスト教と対比して、次のように述べている。

仏教では、たとえば、釈尊が、「如我等無異」(我が如く等しくして異なること無からしめん)と、仏と凡夫が一体であるとの平等観を説いているように、神と人間を峻別して、神の下での平等を掲げるキリスト教的平等観とは明らかに異なり、世界宗教史のもう一つの水脈を形成していると思います。(下巻、29頁)

キリスト教では、神は人間とはまったく別の存在であり、人間に対して一種の命令をする。それに対して、仏教では、釈尊が自分と同じような悟りがあなたにもできると説く。釈尊は法を体現した「手本」であって、それを学ぶことによって人びとも同じ境涯に立てるというのである。釈尊は、凡夫に命令するのではなく、自ら「手本」を示して法を伝えているのだ。

こうした池田の仏教とキリスト教の対比は、マックス・ヴェーバーの宗教社会学を想起させるだろう。ヴェーバーは、宗教がその教えを伝える方法には、「使命預言」「模範預言」という二つの基本類型があると指摘した。使命預言とは、「神の名において、もちろん倫理的な、そしてしばしば行動的・禁欲的な生活の要求を現世に突きつけるような預言」であり、キリスト教やイスラム教など人格神をもつ宗教に多く見られる形態である。これに対し、「模範預言」は、人格神を持たない仏教を典型とし、「生活の模範を身をもって示すような預言」を指す⁽¹⁶⁾。ヴェーバーも、仏教の教えが、キリスト教のような神の名による命令ではなく、非人格的な法を体現した「模範」を通じて示されると指摘しているのである。「法」は、神の言葉(Logos)ではなく、「模範」、すなわち、池田のいう「手本」によって伝えられる。仏教の教えは、あくまでも「法」を体現した師匠の振る舞いを「模範」「手本」として、弟子が習っていくしかない。

だとすれば、仏法で師弟が強調されるのは、ある意味では当然といえないだろうか。

(4) 仏法の実践

では具体的な仏法の実践とは何だろうか。これは、先に述べたように、究極的には「手本」となる人間の振舞いを通してしてしか示すことはできないが、ここでは、言葉で説明できる範囲で考察してみたい。池田が、仏教の実践の手本としてしばしば指摘するのは、法華経で説かれた常不軽菩薩の実践である。

常不軽菩薩は、正しい仏法を行じたがゆえに、あらゆる僧俗から大変な迫害を受けましたが、少しも恨むことなく、「我深く汝等を敬う、敢えて輕慢せず、所以はいかん、汝等皆菩薩の道を行じて、まさに作仏することを得べし」と唱えて、礼拝してやまなかったというのです。／まさに、常不軽菩薩は、自分を迫害する人々のなかに、「仏性」すなわち「我を礼拝する影」を見てとったのです。(下巻、276頁)

常不軽菩薩は、自分を迫害する人たちに対して、「私は深くあなた方を敬って、あえて輕んずることはしない。なぜかといえば、あなた方も、仏性を内在させている限り、いつかは菩薩の修行をして成仏するであろうからである」といって礼拝した。これは容易なことではない。「あらゆる人に仏性があります」などということは、ある意味で簡単だ。しかし、自分が嫌いな人、自分を迫害するその具体的な一人ひとりに、仏性があると信じることは至難である。それを実践し、自分の周りの一人ひとりを大切にしていっていったのが、常不軽菩薩であった。

仏法の実践は、決して抽象的な綺麗事ではない。池田は、仏教には「物事を客観的存在として捉えるという知的操作以前に、まずもってその言葉が主体的に生きられ、思索され、実存の深みにまで掘り下げられた実践智」(下巻、275頁)があるという。池田は、コロンビア大学での講演『「地球市民」教育への一考察」(1996年)⁽¹⁷⁾で、仏教の「慈悲」について、「好きとか、嫌いという人間の自然な感情を、無理やりに抑えつけようとするのではなく、決してありません」と指摘したあと、「たとえ嫌いな人であったとしても、自身の人生にとっての価値を秘めており、自己の人間性を深めてくれる人となり得る。こうした可能性に目を開きゆくことを、仏法は呼びかけているのであります」と生活に即した具体的な姿勢を示している。それは、目の前にいる一人を徹底して大切にしてきた池田のまさに「実践智」の一つであると思われる。

一人ひとりを大切にしていくこと——これこそが最も重要な仏法の実践だ。池田は釈尊の行動についても、このような観点から、次のように述べている。

釈尊は「人間のための宗教」を打ち立てたのです。／あるとき、釈尊は、病人のために藁のベッドを調べ、体を拭いてあげ、汚物で汚れた衣を洗濯して干してあげた。そして、周囲の人に、「この方の面倒をよく見てあげてください。なぜなら、悩める人に奉仕することは、仏に仕えることと同じなのですから」と語るのです。(下巻、45頁)

釈尊の実践も、具体的に困っている一人を大切にしている姿勢に貫かれていた。さらに、池田は、一人の人を大切にすることの重要性を示すために、キリスト教の聖書も用いている。マタイ伝福音書(第18章12-14節)には次のようにある。「汝等いかに思ふか、100匹の羊を有する人あらんに、若しその1匹まよはば、99匹を山に遺しおき、往きて迷へるものを尋ねぬか。もし之

を見出さば、まことに汝らに告ぐ、迷はぬ99匹に勝りて此の1匹を喜ばん。かくのごとく此の小さき者の一人の亡ぶるは、天にいます汝らの父の御意にあらず。」この話を通して、池田は次のように述べる。

99頭というのは、いわゆる“量の世界”であり、1頭とは、“質の世界”ともとれます。／……宗教は、「迷い出た1頭」をどうするかという視点を欠くと、どうしても制度化し、形骸化してしまいます。……／ 私の恩師（戸田城聖第2代会長）は、この世の中から「貧乏人と病人をなくす」ことが宗教の使命であると、まことに簡潔に語っていました。／ これは……現実の苦悩に押しつぶされ、思い迷う“1頭”の救済にこそ、宗教の本義があることを述べたものです。（上巻、334-5頁）

「現実の苦悩に押しつぶされ、思い迷う“1頭”を救う、そうした一人の人を大切にする姿勢こそが、宗教の生命線なのだ。」⁽¹⁸⁾

先に私は、人間主義と仏教を考察する問いを4つあげた。ここではその答えを確認し、本節の内容をまとめておきたい。まず、不可能を可能にする人間の力を、仏教では「仏性」と説いた。仏法の「法」は、神のロゴスではなく、人間の行いの中に体现される。だからこそ、「手本」となる師匠に学ぶことによってのみ、「法」は伝えられるのである。そして、その実践は、常不軽菩薩に体现される、一人ひとりを大切にする実践であった。池田は、この仏教の人間主義の思想を縦横に展開して、ゴルバチョフをはじめとした世界の知性と対談を展開したのである。

5. むすび

人間主義は、すべての人間がもつ「自らの行動によって運命を切り開いていく力」を出発点とする。無限に多様で矛盾にみちた現実を、余すところなく解き明かす理論など存在しない。しかし、人間には、矛盾に満ちた現実を拓いていく力、不可能を可能にしていく知恵がある。そうした人間の力、知恵を開くことなく、いかに立派な理論を作っても意味がないだろう。最終的に問題を解決するのは、抽象的な理論ではなく、具体的な人間の知恵だからだ。

この人間の力、知恵を、仏法では「仏性」と呼んだ。すべての人がもつこの「仏性」を開く「法」は、ロゴス（言葉）では表現されない。それは、その法を体现した人間の「行」の中でしか現れないのだ。常不軽菩薩がおこなった「行」は、目の前の一人のひとを大切に、その仏性、無限の可能性を信ずることであった。一人ひとりを大切に——これこそが人間主義の思想であり、実践である。なせなら、人間のもつ力、知恵を開くことこそが人間主義の出発点であるからだ。

冒頭で私は、池田大作の行動がここまで世界で賞賛を受けるのは、彼が一人ひとりを大切にするという実践を貫いてきたからだと述べた。この池田の行動こそが人間主義の実践であることはいままでもない。

池田は自身が創立した創価学園・創価大学で教育を受けた同窓生に対し、次のような詩を贈っている。⁽¹⁹⁾

私は信ずる！
いかに遠回りに見えようとも
究極において
人類の闇を破り

未来を照らしゆく光は
断じて「人間」の中にあると！

池田は、具体的な一人ひとりの可能性を開きながら、世界に友情のネットワークを広げ、人類の未来を拓いてきた。それはまさに「人類の闇を破り、未来を照らしゆく光は、断じて『人間』の中にある」ことを証明する行動であった。この創立者の実践を「手本」として、人間主義の実践を貫くことこそ、創価教育に学ぶ一人ひとりの使命である。

(注)

- (1) 本稿は、創立者・池田大作先生のロシア訪問30周年を記念し2004年10月1日に創価大学・学生ホールで行った講演（主催・創価教育研究センター）の内容を加筆修正したものです。講演当日に熱心に話を聴いていただいた皆様に感謝申し上げます。また原稿にするにあたり、本文中の敬称は略させていただきます。
- (2) 池田のソ連・ロシアとの交流については、池田大作『私のソビエト紀行』潮出版社、1975年、また、中澤孝之『ゴルパチョフと池田大作』角川出版、2004年、などを参照。
- (3) 2005年1月22日現在。
- (4) 池田大作『大道を歩む』毎日新聞社、1998年、57頁に引用。
- (5) 『聖教新聞』1990年7月28日。
- (6) ミハイル・S・ゴルパチョフ、池田大作『20世紀の精神の教訓』（上下巻）潮出版社、1996年。同書はすでに、日本語、ロシア語だけでなく、ドイツ語、イタリア語、フランス語、ハンガール語、中国語に翻訳されている。
- (7) 以下、『20世紀の精神の教訓』からの引用は、本文中に括弧で上下巻と頁数を記した。
- (8) 以下、聖書からの引用は『旧新約聖書』（文語訳）日本聖書協会、1997年に依った。
- (9) 池田大作、ヨハン・ガルトゥング『平和への選択』毎日新聞社、1995年、75頁。
- (10) 池田、ガルトゥング『平和への選択』77頁。池田の同趣旨の発言は多い。例えば、「カントは理性、彼の言葉を使えば『悟性(Verstand)』の限界を見抜いていた。合理的な理性で人間はすべてを理解できるというのは、人間の傲慢であり、越権であると考えた。……／ 悟性だけに寄り掛かってつくられた見解や哲学、意見が『独断』に陥るということを、カントは見抜いていたのです。」（マジッド・テヘラニアン、池田大作『21世紀への選択』潮出版社、2000年、152-3頁）また、こうした見解は、必ずしも池田に独自のものではない。たとえば、ヴェーバーは社会科学の方法論をめぐって、「一つの完結した諸概念の体系を作り上げ、その中で現実は何らかの意味で究極には妥当するような〔諸概念の〕一つの組成の中に集められ、その体系からその後再び〔新たなどんな〕現実をも演繹され得る」ことなど将来にもありえないと指摘している。「測りきれない出来事の流れは永遠に向かって果てしなく流転している」のだ（『社会科学の方法』祇園寺信彦・祇園寺則夫訳、講談社学術文庫、1994年、93頁、傍点原文）。
- (11) 池田大作『海外諸大学講演集・21世紀文明と大乘仏教』聖教新聞社、1996年、54頁。
- (12) 池田大作、ヴィクトル・A・サドーヴニチ『新しき人類を 新しき世界を』潮出版社、2002年、92-3頁。
- (13) 池田『海外諸大学講演集』364頁。
- (14) 日蓮「崇峻天皇御書」（創価学会編『日蓮大聖人御書全集』1952年、1174頁）
- (15) 日蓮「三世諸仏総勘文教相廃立」（『日蓮大聖人御書全集』564頁）
- (16) マックス・ヴェーバー『宗教社会学論選』大塚久雄・池松敬三訳、みずさ書房、1972年、65-6頁。傍点は原文。ただし、「模範」、「手本」によって示される仏教の修行の内容については、ヴェーバーと

池田の見解は一致しない。ヴェーバーは、「通例はそうした瞑想的で無感動的・エクスタシス的な生活」と述べ、基本的に瞑想的な修行を想定しているのに対して、池田のいう仏教の修行は、後に論ずるように、民衆の中で法を説き、一人ひとりの仏性を開いていく菩薩行である。

(17) 『聖教新聞』1996年6月16日。

(18) 池田は、他宗派を教条的に否定することはしない。こうした彼の姿勢は、次の発言の中に明確に示されている。「宗教には、“人を眠り込ませる宗教”と、“人を目覚めさせる宗教”がある。21世紀の宗教が歩むべき道がどちらにあるかは明らかでしょう。／これからの時代は、仏教、キリスト教、イスラム教といった“宗派”の縦軸だけでなく、“人間”というヨコ軸の視点から、宗教を判断する必要がある。」(『『平和の世紀』の大道——21世紀の世界と日本を見つめて』聖教新聞、2001年12月25日) 池田は、あくまで“人を目覚めさせる”、すなわち、一人ひとりの人間の可能性を開くか否か、という人間主義的な視点から、思想・宗教を論じている。実際に、彼は、“人を眠り込ませる宗教”を厳しく批判する一方で、“人を目覚めさせる宗教”間の対話を積極的に進めてきた。本文で示したように、キリスト教についても、その「ロゴス中心主義」に疑問を呈する一方で、「迷い出た1頭」を大切にする逸話に、彼は共感を寄せている。さらに、このような他宗派への評価は、池田の一貫した姿勢であることにも注目したい。例えば、1970年代初頭に行われたトインビーとの対談でも、12世紀西欧のキリスト教の聖者であるアッシジのフランチェスコについて、次のように発言している。「私は仏教の信奉者ですが、フランチェスコは十分に尊敬に値する聖者であると感じています。イエスやフランチェスコは、仏法の概念でいうと、菩薩界に位置する人々です。すなわち、菩薩とは、慈悲をもって世のため、人のために奉仕する、人間生命の状態なのです。」(A・トインビー、池田大作『21世紀への対話』文藝春秋社、上巻、1975年、73頁)

(19) 「世界に輝け！ 創価同窓の光」(『聖教新聞』2004年3月29日)